

博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名

李 現

論文題目

菅原道真の漢詩文における『莊子』の受容

論文審査担当者

主 査 中前 正志

審査委員 大谷 俊太

審査委員 坂本 信道

審査委員 滝川 幸司

本論文は、菅原道真の漢詩文に見られる『莊子』受容について、「秋湖賦」および寛平二年(890)時の三首連作「北溟章」「小知章」「堯讓章」を取り上げて論じている。『莊子』の注釈のうち郭象の注と成玄英の疏の精密な読解を踏まえたうえで、それらを道真がいかに関作品中に生かしているのかを解明しつつ、そこからさらに道真の思想などにまで迫ろうとした意欲作である。

また、整備された構成を備えてもおり、道真の上記作品をそれぞれ論じた第一章～第四章より成る本論を基軸として、その前に三節に分かれた序論、その後『徒然草』の『莊子』受容を取り上げた附論および全体を総括する結語を配している。

序論のうち、第一節「唐代の朝廷と『莊子』」では、諸書に収載される『莊子』に関する勅命を取り上げ、「莊子」という人物がどのように神格化されているかを述べるとともに、『莊子』をテーマとする科学策問を取り上げて分析し、唐王朝における『莊子』の位置づけを明らかにしている。第二節「菅原道真と『莊子』」では、平安時代における『莊子』受容の全体像をまとめたうえで、研究史を踏まえつつ道真の漢詩文における『莊子』利用について概観する。そのうえで、続く第三節「本論文の目的」において、本論文の目的を提示し、構成について説明している。唐代、平安期、そして道真における『莊子』受容について順次確認がなされており、正当な手続きのもと、本論にて論じる前提が適切に示されていると言えよう。

本論の第一章「菅原道真の「秋湖賦」と『莊子』 詩語「涯岸」をめぐって」では、「秋湖賦」を取り上げ、その制作時期を上記三首連作が作られたのと同じ頃と想定したうえで、そこに見える「涯岸」という語に鋭く着眼している。同語が道真の詩文では他に二例しか見えず、しかも唐までの詩文には例が少ないことや、『莊子』秋水篇の成玄英疏に由来するものであることを指摘しつつ、その「涯岸」が皇恩に関わって使用されていることを明らかにする。そして、『莊子』の内容を素材として、それを君臣の情という儒家的な文脈に取り込んでいるという、道真の表現技法などを考えるうえでの看過し難い特徴を炙り出している。

第二章「菅原道真の斉物觀の形成 「北溟章」に見える白居易詩の影響」では、寛平二年、道真が讃岐守の任期を終えて帰京した時に作られた、『莊子』逍遙遊篇の寓言に取材する三首連作の中から、まず「北溟章」を取り上げている。「北溟章」の内容の解釈について確認したうえで、同

作において描出される道真の齊物観が、『莊子』の郭象注、成玄英疏の影響を受けているとともに、白居易の「齊物」を詠じる詩に倣うことを指摘して、『莊子』注疏から白居易を経て菅原道真に至る経路を明らかにしている点、評価に値しよう。また、関連して、讃岐時代の作品に庶民階層の生活を描いたものが少なくないと指摘する点も、興味深い。

第三章「菅原道真の「小知章」と『莊子』 詩語「有待」と「無待」をめぐる」は、三首連作の中から「小知章」を取り上げ、まず、この作品が、『莊子』成玄英疏に見える、何かを頼みとすることを示す「有待」と、何にも頼らないことを示す「無待」(「無為」)とをめぐる議論を展開し、前者を否定して後者を肯定していることを、的確に把握する。そのうえで、『莊子』注疏だけではなく、陶弘景『真誥』や支遁『逍遙論』にも目を向け、それらの影響をも受けていると論じている。先行研究への更なる目配りが必要な問題でもあるが、論者の視野の広さ、探究心の強さを示すものであろう。

第四章「菅原道真の「堯讓章」と『莊子』 道真の聖賢観について」では、三首連作のうちの第三首「堯讓章」を取り上げている。先行研究においてほとんど考究されてこなかった詩語「優遊」に焦点を当て、郭象注および成玄英疏さらには白居易「汎渭賦」との関係を分析しつつ、本作における道真の聖賢観を抽出したうえで、最終的に、儒家思想を超えて隠者を志向するという道真像を提示する。より具体的には、自らを隠者・許由、宇多天皇を聖人・堯に擬えているというもので、綿密な検討を経て得られた結論として、注目されよう。

附論「『徒然草』第七段と白居易の人間観 『莊子』との関わり」は、兼好が『徒然草』第七段で、『莊子』逍遙遊篇と天地篇の内容を並べて引用している意図を分析して、その人間観が逍遙遊篇の堯の精神のあり方と関わっていることを論じ、また、「四十に足らぬほど」という年齢の節目について、白居易の年齢意識と関わること、その点も『莊子』に基づいて考えられることを指摘する。そして、ともに『莊子』に関わる、兼好と白居易の人間観に説き及んでいる。『徒然草』を「儒釈道兼備の書」と捉える江戸初期以来の『徒然草』注釈史に対して、より丁寧な目配りが望まれるものの、『徒然草』本文を『莊子』に則して読み解いて見せた本論考は、『徒然草』の一面を鮮やかに浮き上がらせたものとして評価し得よう。

結語では、各章の概要と論文全体の主旨、および、それらを踏まえた将来の展望を述べているが、今後は、『田舎莊子』、『莊子彫題』を中心に、江戸文学と『莊子』齊物思想の関係をも検討したいとするのには、日本文学における『莊子』受容という大きな問題を視野に入れた、研究の一層の進展を期待させるものがある。

以上の本論文において最も高く評価すべきは、道真の漢詩文に『莊子』が利用されている様相を、『莊子』本文だけではなく、郭象注、成玄英疏の読解を通じて、具体的に指摘したところにある。これまでも指摘はあったものの、それら注疏の精読を通じて得られた成果は、今後の検証を待つ部分があるにしても、必ず参看されるべきものと言えよう。

但し、すべてを『莊子』に収斂させていく方法は、漢詩文の読解として危うい面もある。論者自身が指摘するように、出典の文章を、本来の文脈の意味から切り離して利用する場合が漢詩文にはあり(断章取義)、果たして、『莊子』および諸注疏を、その思想まで踏まえて表現したのかは再検証する必要がある。また、先行研究の目配りに不安が残る面もある。外国人という立場であることを考慮しても、日本語の表現に不備があり、中でも漢文訓読にミスが目立つのは、日本文学とし

て漢文学を扱う際には問題になるところである。

しかし、以上のような課題を持ちつつも、丹念な検証には見るべきところが多々あり、今後の研究の進展も十分に予測される。

以上のことから、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに適格であると判断する。